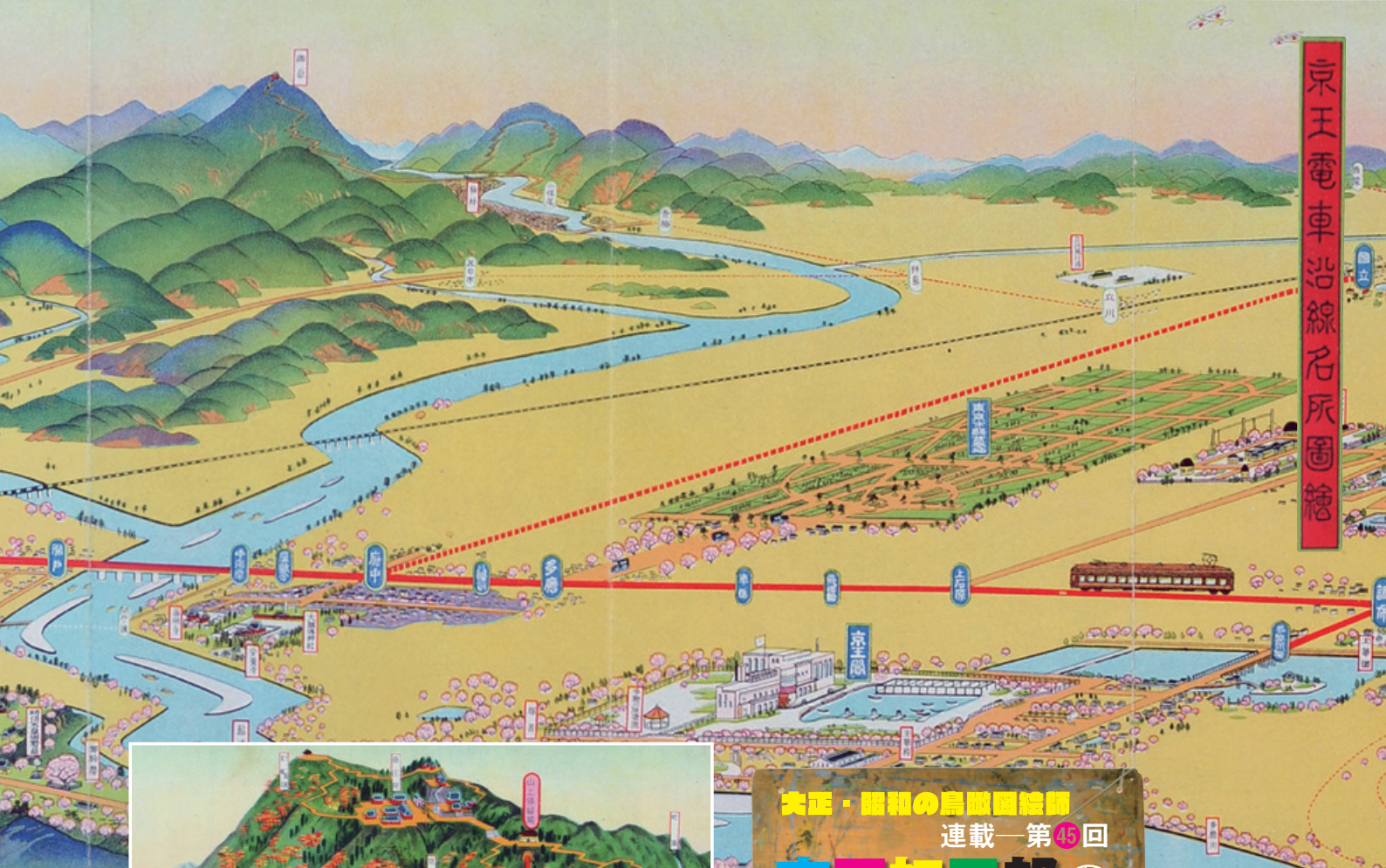




『武州高尾山案内』金子常光 作画（昭和3（1928）年）
高尾登山鉄道 発行／日本名所図絵社 作成



京王電車沿線名所図絵

文・藤本一美

text by Kazumi FUJIMOTO

昭和三年一月に吉田初三郎作品の「京王電車沿線名所図絵」が刊行された。図柄は、四谷新宿―東八王子の路線と多摩御陵（大正天皇陵墓・昭和二年設立）までの予定線を横長軸に、新宿御苑、十二社、明治神宮、深大寺、京王閣、高幡不動尊、百草園、高尾山などの沿線名所を立体的に描画した彩色図（本図）となっている。当時のターミナル周辺は、今は廃止の路面走行だった。

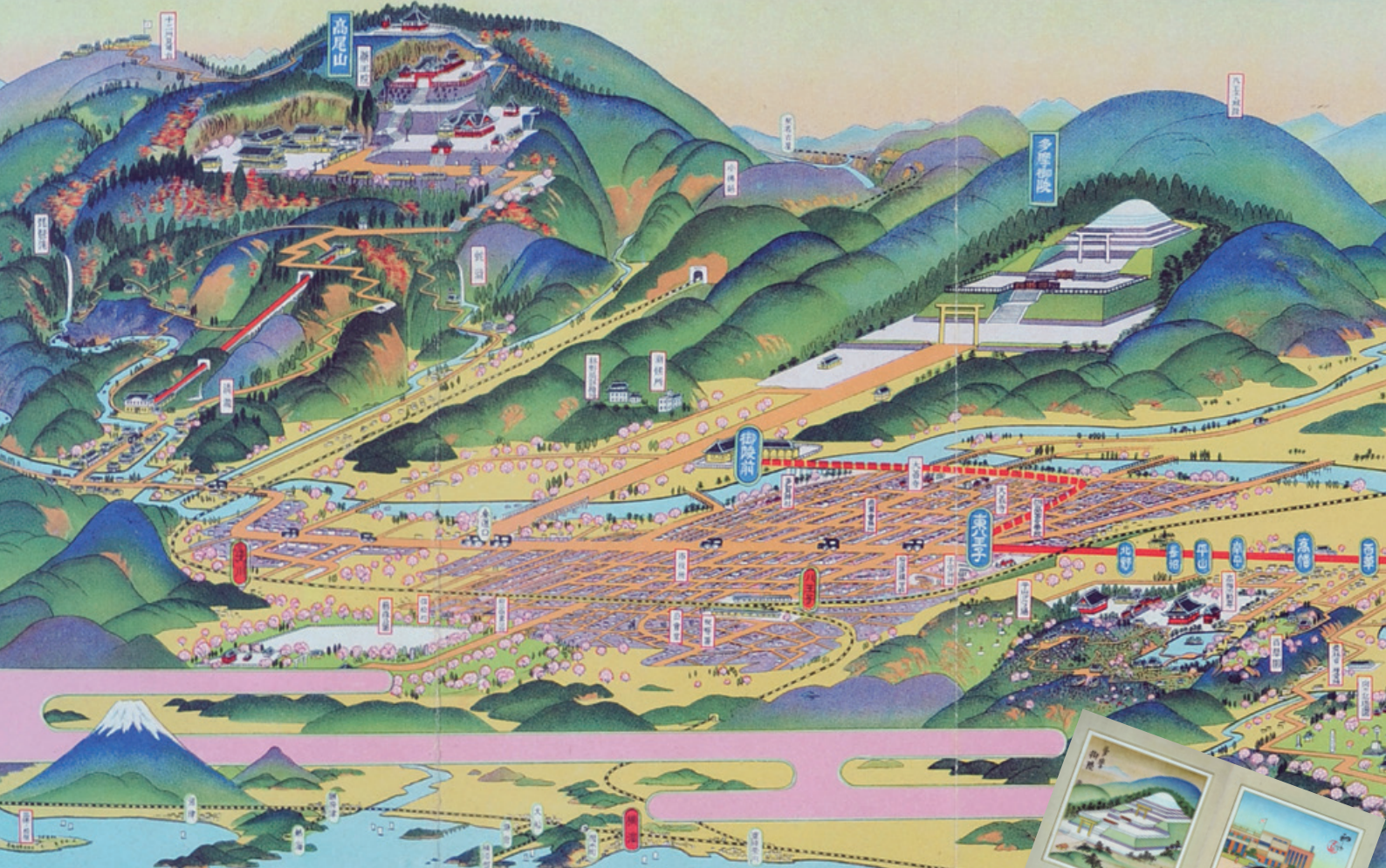
昭和五年秋に、改版が刊行。本誌二十五号（平成二十年）で既に掲載した。翌六年に北野から御陵前までの路線延長が敷設開通することを見込んでの発注だったようだ（現在は廃止）。

また、高尾線が高尾山口まで延伸し、高尾登山電鉄へのアプローチが便利に。本図左端の索道（軌道）が生き生きと表現されていて楽しい。

高尾登山電鉄の営業開始は昭和二年で、戦時中は一時休止したものの、昭和二十四年に営業を再開。昭

藤本一美

元首都大学東京・専修大学非常勤講師。地図情報センター理事。日本地図学会会員。鳥瞰図・展望図資料室兼山岳情報資料室主宰。近・現代の鳥瞰図絵師の作品収集と研究に精力的に取り組んでいる。著書に『旅と風景と地図の科学Ⅱ』（私家版2006年）、最新刊に『展望の山50選 関東編』（東京新聞出版局）がある。



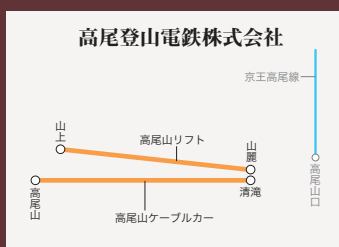
「高尾山と人をむすぶ」 日本一の急勾配を走る ケーブルカー

高尾山のケーブルカーは、高尾山薬王院を参詣する信徒のために発案された。大正10年9月に高尾索道株式会社が設立。大正14年5月には社名変更により高尾登山鉄道となり、昭和2年1月に清滝駅－高尾山駅間のケーブルカーが開業した。また、高度経済成長期の昭和39年には、ケーブルカーに並行して山麓－山上間にリフトの運転を開始。以来、日本一の急勾配を走るケーブルカー、リフトともに、子どもから大人まで、高尾山を訪れる人々の足として親しまれている。

一方、高尾山の自然を守り、後世に引き継いでいくという社会的使命から、高尾山上においては、展望台のほか食堂、売店、高尾山さる園・野草園などの観光施設を運営。「高尾山と人をむすぶ」を経営理念に掲げ、自然に親しみ機会とサービスの提供にきめ細やかな企業努力を重ねている。

高尾登山電鉄株式会社 Takaotozan Railway Co., Ltd

設立：大正10年9月29日
本社：八王子市高尾町2205



『京王電車沿線名所図絵』

(昭和3(1928)年1月1日発行)

京王電気軌道 発行

犬山日本ライン 蘇江 吉田初三郎出版部 印刷
本図裏の解説は観光社による稿「絵に添へて一筆(初三郎)」



和四十三年には近代的大型ケーブルカーとなり、大きな窓からは新緑・紅葉(黄葉)や日本一の急勾配、三十一度十八分を存分に楽しめるのだ。

本図では、ピンクの桜と赤、黄のモミジの同居した姿(筆致)が目を惹く。

大勢の集客に恵まれて、平成十九年、ミシュランガイドに霊場高尾山薬王院が紹介された。年間五百万人の行楽客や登山客が訪れるようになり、人口に膾炙している。

創立以来、長く独立して経営を続けてきたが、平成二十九年より京王グループの一員となり、グループ一体となって高尾山における観光輸送を担っている。

余談だが、ケーブル終点の山上駅近くの高尾山ビアマウント(標高五〇〇m地点)からは都心の夜景だけでなく、日中は奥多摩など関東一都六県の絶景パノラマが眺められ、平成二十三年には「高尾山大パノラマ手捺染」(藤本一美作画・千円)が発売されたが、現在は品切れ中である。

なお、彩色画「高尾山大パノラマ」(同作画・平成二十五年編集)も、別途刊行した。